



Title	縦断調査からみた「育児不安」の性格
Author(s)	岩田, 美香
Citation	北海道大学教育学部紀要, 74, 23-48
Issue Date	1997-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29541
Type	departmental bulletin paper
File Information	74_P23-48.pdf



縦断調査からみた「育児不安」の性格

岩 田 美 香

A Longitudinal Study Focusing on Mothers' Experiencing Child-Rearing Anxiety

Mika IWATA

1. 問題の背景と課題の設定

子育てをめぐる問題について、特に近年は少子化に対する子育て支援策の要求からも、「育児不安」やその極にあるとされる「児童虐待」が社会問題視されている。しかし、「育児不安」に代表される、子どもを育てている母親のネガティブな感情についての論議は、20年ほど前から注目され、これまでに一定の成果はあげてきたものの、結局のところ「育児不安」が何ものであるのかを突き止められないまま、近年の子育てに関する研究の隆盛は「父親」研究へと推移しているように思われる。

ところで、育児をしている母親の意識や感情について、「育児不安」として一連の研究を先駆的に実施したのが牧野⁽¹⁾であり、彼女は、母親たちが自分たちの生活感情や意識を表明した言葉を①一般的疲労感、②一般的気力の低下、③イライラの状態、④育児不安徴候、⑤育児意欲の低下、という5つの特性に分類していく中で、「育児不安尺度」を作成した。しかし、「育児不安」の定義としては、「子どもの現状や育児のやり方などについて感じる漠然とした恐れを含む不安の感情。疲労感や焦り、イライラなどの精神状態を伴う。悩みや恐れはそれを引き起こす特定の対象があるのに対して、不安は明確な対象がなく漠としている。」であり、「いわゆる健康な育児行動を阻害する一種の負荷事象を主観的に表明したもの」という曖昧なままになってしまった。

その後の「育児不安」や「育児ストレス」に関する構造的把握の結果について概観していくと、佐藤他は、「育児関連ストレス」を「子ども関連育児ストレス」と「母親関連ストレス」に構造化し、前者を「子どもについての素朴な評価（脅威・危機の知覚）に基づくネガティブな経験」、また後者を「ストレスフルと評価された事態（例えば、子どもの発熱や人見知り）への対処可能性やサポートへの期待等を反映した上での事態への否定的な評価」とし、「子ども関連育児ストレス」→「母親関連育児ストレス」→「抑うつ重症度」への影響の妥当性を示した⁽²⁾。岩田は、先に述べた牧野による「育児不安」尺度の改訂と構造化の試みから、「育児不安」全体を「育児をしている母親の不安」とし、その中で「生活疲労」・「母親の充実感」・「育児不安」という3つの要因を見いだした。「育児をしている母親の不安」は、誰もが程度“健康的に”抱えているとした上で、子どもとの関わりの中で生じる「育児不安」因子よりも、母親関連の要因である「母親の充実感」因子へのアプローチが「育児をしている母親の不安」を軽減することを示した⁽³⁾。さらに、川井他は、0～6歳児をもつ母親に対し、育児不安概念の明確化と臨床に役立つ知見を得ることを目的として調査を実施し、0～2歳と3～6歳とでは育児不安の質が異なっている可能性を示唆した上で、主に「不安・抑うつ因子」と「育児困難因子」を抽出した。前者が母親自身のもつ精神的な問題であり、いわば育児不安の生じる基盤であるのに対して、後者は育児に関する不安、自信のなさ、負担感を示し、しかも子どもの状態と関わりなく育児上の

不安を示すことから、この心的状態こそが「育児不安」の本態に近いものと考えた⁽⁴⁾。また庄司は、「育児不安」についての概念整理として、通常的不安ともいえる①「現実的な不安」、母親の訴えについて助言しても不安の軽減しにくい②「不安の強い場合(不安状態・不安発作)」,③「うつ状態」,④「不満・イライラ状態」と分類している⁽⁵⁾。

これらの分類や構造化を大枠でまとめてみると、それぞれが用いている用語が規定している内容に相違はみられるものの、佐藤他・岩田は「育児不安」を母親関連と子ども関連に大別しており、川井らと庄司は「育児不安」を、健康的な不安と積極的対応が必要な不安と医療的・専門的対応が必要な不安とに区分しているといえる。

しかし、これらの研究のいずれもが顕在化している「育児不安」を対象としていることから、子育てをしている母親の困難さを分析するという意味では、研究の限界があることを押さえておかなければならない。すなわち、本村⁽⁶⁾・岩田⁽⁷⁾が指摘したように、「育児不安」は育児をしている母親が感じるネガティブな感情の総称ではあるが、実際の子育ての大変さ・困難さと連関するとは限らないものである。よって本稿では、「育児不安」が一定の階層性を帯びているという仮説のもとで、その「育児不安」が、どのように特徴づけられるのかを問題とする。子育てにおける「不安」だけでなく困難をも説明しうる社会的次元からのアプローチ⁽⁸⁾による分析の中で、この「育児不安」がどこに位置するのかを明確にするためにも、ここで「顕在化されている育児不安」の性格規定をすることが必要となる。

さて、これまでの「育児不安」研究では、育児の最中にある母親の主観である「育児不安」について、研究者が(主に尺度を通して)“客観的”に問題性の高い「育児不安」を判断するという方法が用いられてきた。しかしここでは、先に述べた「育児不安」が顕在化していた母親に対して縦断的に面接調査を実施することにより、育児を担っている主体である母親自身の客観視された「育児不安」を把握することを試みる。これは、子育ての外にあって「育児不安」を客観的にとらえようとする研究者の視点とも、あるいは子育ての最中にある母親が主観的にとらえる「育児不安」とも異なった「育児不安」の視点となる。さらに、子どもの成長や、育自といわれる母親自身の成長に伴って、どのように「育自不安」が推移したのかというプロセス研究としての意義も存在している。

これら先行研究を踏まえつつ、本研究での主な課題を次の3点とする。

課題1：子どもが小学校へ入学した時点で、母親の「不安」「悩み」はどのように変化し、また、4年前の調査時において主観的に述べられていた「育児不安」は、どのように特徴づけられるのか。

課題2：「育児不安」が解消されているとしたら、その要因は何であったのかを母親の社会関係を中心に検討する。

課題3：現代における顕在化された「育児不安」の社会的性格を概観する。

以下、3節で課題1と課題2を、そして4節において課題3を考察する。

2. 調 査 概 要

(1) 手続きと期間

①前回の調査：

平成5年に札幌市にある9つの保健所を通して、3歳児健診で来所した母親にアンケート用紙を配布し、後日郵送による回収を行った。947票を配布し、291票を回収した(回収率31%)。

アンケート用紙の最後に、面接調査に協力してもらえる人に名前と連絡先を書いてもらい、291名中59名が応諾してくれたが、最終的に44名が面接調査対象者となった。面接は、調査協力者の自宅や職場に伺って実施した。実施期間は平成5年9月上旬～10月中旬。

②今回の調査：

4年前に3歳児をもち、面接調査を実施した母親44名に対して、再び面接調査依頼書を郵送し、調査に協力してもらえる人に返送ハガキを送付してもらった。

44名中12名が宛名先不明で連絡がつかず、残り32名中20名が応諾してくれた。面接は、前回同様に調査協力者の自宅へ伺い実施したが、1名は職場の昼休みを利用して実施した。実施期間は、平成9年4月下旬～5月下旬。

(2) 調査対象

現在小学校1年生のこどもをもつ母親20人。現在の平均年齢は37.3歳である。

対象者の詳細は、表1に示すとおり。

今回の対象者は、前項の手続きを経て協力が得られた母親たちである。最初の質問紙調査における291名から比較して⁽⁹⁾今回の対象者の特徴を述べると、最初の質問紙調査から「専業主婦」の割合は約8割と高かったが、今回も「フルタイム」で働いている母親は1割であり、パートや在宅での仕事（多くがカタログ等による生活用品販売）をもちつつも、家での生活が中心の母親となった。母親の学歴では、常に高校卒業が5割を越しているが、調査の回を増すごとに大卒の

表1 調査対象者

No	年齢	家族構成	年 収	学歴	前回の仕事	現在の仕事
5	37	祖父, 祖母, 夫, ♂(6)	300～500万円未満	高校	パート	パート
6	36	夫, ♀(9), ♀(6)	300～500万円未満	大学	専業主婦	専業主婦
8	36	夫, ♀(9), ♂(6), ♂(2)	500～700万円未満	短大	専業主婦	パート
18	37	夫, ♂(6)	500～700万円未満	大学	在宅プログラマー	専業主婦
30	32	夫, ♂(7), ♂(1)	500～700万円未満	高校	専業主婦	専業主婦
80	35	祖父, 祖母, 夫, ♀(11), ♂(6)	500～700万円未満	高校	ハーブ教室, 生活雑貨販売	パート
103	31	夫, ♂(6), ♂(1)	300～500万円未満	高校	専業主婦	専業主婦
115	36	夫, ♀(10), ♀(6)	500～700万円未満	短大	専業主婦	パート
122	40	夫, ♀(10), ♂(6)	500～700万円未満	短大	イラストレーター	陶芸教室
129	39	夫, ♀(10), ♀(6)	200～300万円未満	高校	在宅事務	生活雑貨販売
145	38	夫, ♂(9), ♂(6)	500～700万円未満	短大	専業主婦	教材添削
155	44	夫 (不在), ♂(17), ♂(13), ♀(7)	300～500万円未満	高校	専業主婦	パート
165	39	夫, ♂(8), ♀(6)	500～700万円未満	短大	専業主婦	専業主婦
166	39	夫, ♂(6), ♀(3)	700～1000万円未満	高校	専業主婦	専業主婦
172	32	夫, ♀(6)	700～1000万円未満	高校	専業主婦	専業主婦
210	37	夫, ♂(10), ♂(8), ♀(6)	500～700万円未満	大学	専業主婦	専業主婦
244	32	夫, ♂(6), ♂(4)	300～500万円未満	専門学校	専業主婦	専業主婦
257	48	祖父, 祖母, 夫, ♀(6)	300～500万円未満	高校	自営業, 化粧品販売	自営業, 化粧品販売
282	40	夫, ♂(9), ♀(6)	1000万円以上	大学	小学校教諭	小学校教諭
287	38	夫, ♂(9), ♂(6)	1000万円以上	高校	看護婦, 生活雑貨販売	看護婦

割合も高くなっている。また、年収では、1995年当時における年収で「500～700万円未満」の層が、夫の職業では「公務員・団体等職員」の層が、相対的に高くなってきている。

(3) 調査項目

- I. フェイス・シート
- II. 母親の生活
- III. 子ども・子育てについて
- IV. 母親自身について
- V. 母親自身からみた「育児不安」

3. 「育児不安」の特徴

(1) 「育児」不安と「子育て」不安

わが子を育てていく過程で、小学校入学という一つのステップを越えたばかり（調査実施は4月下旬から5月下旬と入学間もない）母親たちが、これまでの育児を振り返る中で「育児不安」というものをどのように捉えているのであろうか。まず、全体的印象としては、今振り返ると「時が過ぎたら笑えること、年をとってくればおかしさに変わるようなもの（＃257）」、「今思うと一つ一つがチェと言うぐらい小さな、くだらないことだった（＃129）」、「今思えば、へのかっぱという感じ（＃5）」、「あっという間に過ぎてしまうよ（＃166）（＃122）」、「今思うと笑ってしまうことが多い（＃6）」、「すぐに楽になる、あっという間のこと（＃172）」という声があがっているように、その深刻さは相対的に小さくなっている。このように母親たちに思わせる背景として、母親自身がとらえている「育児」の期間がきわめて限定されていることがあげられる。母親たちに「育児」・「子育て」について、それぞれ子どもが何歳ぐらいまでを考えているか・イメージしているかをたずねたところ、以下に示すような意見が出た。（全体の傾向は、表2を参照のこと。）

＃5

「育児」……幼稚園の年長まで。

「子育て」……具体的な指示を出すのは小学校の中学年まで。

その後は、子ども自身の自我を親の責任で見守るだけ。

＃6

「育児」……幼稚園まで。

「子育て」……小学校まで。

中学校は子どもが大人へと変化する時期で、不安も教育のことになる。

＃8

「育児」……幼稚園に行く前まで。

「子育て」……高校生が終わるくらいかな。

＃18

「育児」……子どもが自分で、食事やトイレを少しでもできるようになったら。

自分の考えで動けるようになったら。

（おしっこに行ったり、おなかすいたとか寒いと言ったり…）

「子育て」……子どもが家庭をもつまで、子育ての形は変わるが続くと思う。

子どもが結婚したいと言うときにも、相手を連れて親の意向をうかがうべき。

30

「育児・子育て」…小学校の前まで。

80

「育児」……小学校に入るまで。

「子育て」……2・3歳～小学校終わりぐらい。後は自立。

103

「育児」……幼稚園入学まで。

「子育て」……社会人になるまで。

115

「育児」……幼稚園へ入るくらいまで。

「子育て」……中学卒業までは続く。自分が子どもの時、中学くらいまでは何かと親に言われた。高校から何も言われず、自分の責任で考えるようになった。

122

「育児」……幼稚園まで、送り迎えなど手がかかるという意味で。

小学生になったら一人で行って帰ってくる。

「子育て」……子どもに干渉している間続く、子どもはいつまでも子どもと思うから、中学生（15歳）ぐらいまで。

129

「育児」……幼稚園に入るまで。

「子育て」……子どもが独立するまで。

自分に限って言えば、自分が子どもを産むまで親にケアしてほしかった。

自分のこどもをもってはじめて、親の気持ちも分かったから。

私の子ども達へも、子どもをもつまでケアしてあげたい。

けれど、ケアの仕方は子どもの年令とともに異なってくると思う。

小学校までは、ほめたり叱ったりなどして、子どもを修正しようとも思う。

けれど中学校ぐらい、思春期からは、親は子どものアドバイザーとしてケアしていくのがいいと思う。

145

本当は、まだ続いているのだろうけれど、子どもが小学校に入って「育児」は終わったなと言う感じ。幼児期までかな。

子どもが小学校に入った今では、子どもを変えようと思っても、そう変わるものではない、変えられないと思う。

もちろん、子どもに対して、親としての責任はあるけれど…

155

「育児・子育て」…中学まで。

166

「育児」……3歳ぐらい。

「子育て」……ずっと。

#172

「育児・子育て」…はっきりとはわからない。育児は終わったなという感じ。

子育ては、今は、昔よりも長くなっていると思う。子どもに関わっている期間が増えた。昔は、「じぶんでやりなさい。」と言われた。

自分は、子育てをしているとそんなに感じたことがない。これが仕事だし、苦になっていない。

#210

「育児・子育て」…高校卒業まで親には責任があり続いている。

母親は一生続くもの。

#244

「育児・子育て」…幼稚園に上がるまで。

自分も子育てが終わったという感じはないが、一段落したという感じ。今後は、子どもの勉強が難しくなるから、母親も勉強しなくては…と思っている。

#257

「育児」……幼稚園の年長まで。

「子育て」……ずっと続くと思う。自分自身が育つことも含めて。

#282

「育児」……子どもに手をかける時期、0～6・7歳。

「子育て」……その子が、ある程度自立して（精神的にも経済的にも）独立するまで。

#287

「育児」……幼稚園まで。

「子育て」……社会に出て自分が相手を認められるまで。

子どもが物事の判断ができるまで。

これらを読みとっていくと、「子育て」の期間に関しては、その母親によってばらつきが見られるものの、「育児」の期間については20人中17人が小学校入学をもって「育児」は卒業（終了）したと感じている。ここで、母親が考える「育児不安」の特徴の一つ目として、「育児不安」とは、子どもが乳幼児期である、ごく限られた時期に生じるものであり、その後の「子育て」における悩みや不安とは、一線を画していることがいえる。

では、実際に、母親たちの心配事や子育て上の困難さは、どのように変化してきているのだろうか。4年前の育児上の心配事の内容と現在の子育ての心配事との比較を表2からみていくと、その内容は様々であり、大部分の母親が現在でも何らかの困難や悩みを抱えている。すなわち、子どもを育てていく上で自ずと生じる「子育ての不安」としては今もなお継続しているが、「育児不安」という不安は解消あるいは減少しているということになる。ある母親が「子どもが小学校に入っても、高学年になっていったら勉強のことやイジメのことで悩むようになると思う（#244）」と述べているように、今後は学年が上がるにつれて学力競争に代表される子育て競争へと子ども自身も家族も巻き込まれていき⁽¹⁰⁾、母親たちの心配や不安は高まっていくであろうと予想できる。実際に、「現在の心配事」のなかにも勉強・学習についての心配が5ケース（#80, #115, #172, #210, #282）見られた。それならばなおさらのこと「育児」と「子育て」

という言葉上の違いだけを問題とするつもりはないが、学齢期以降の子育てをしている母親の問題に比べて、取り立てて乳幼児を育てている母親の感情・意識が、「育児不安」としてこれほどまで社会問題視されるのであろうか。

表2 「育児」・「子育て」についての全体的特徴

No	育児の期間	子育ての期間	「育児不安」とは？	アドバイス	前回の心配事	今回の心配事
5	幼稚園の年長まで	小学校中学年まで	育児書通りと思ってしまう	友達作り，本を信じない	同居の姑	同居の姑，子だらしない
6	幼稚園まで	小学校まで	育児の情報が多い	神経質にならず，情報に振り回されない	地域の環境悪い	上の子が精神的に弱い
8	幼稚園へ行くまで	高校が終わるくらい	母と子の相性の違い	気にせず，お金と時間があれば	子どもの遊び食い	遊び食い，言う事をきかない
18	トイレ・食事の自立	子どもが家庭をもつまで	本人の気持ち次第	完璧の壁を打ち破ること	遊び相手	ない
30	小学校の前まで	小学校の前まで	打ち明ける人いなかった，他児比較	ひとりで悩まないで	子の言葉，母の人間関係	子の友人，早口
80	小学校に入るまで	2,3歳-小学校終わりくらい	初めてのことで全て不安，母の孤立	友人増やして情報集める	上の子の学校の勉強	上隠し事：下勉強嫌い
103	幼稚園入学まで	社会人になるまで	みんな横並びじゃないとダメ	子どもを連れて行ける所がない	でべそ，反抗期	子ども太りすぎ？
115	幼稚園へ入る位まで	中学卒業まで	小さなことでも先が見えず不安	アドバイスしようがない	子が友達と遊べない	勉強について（少し）
122	幼稚園まで	中学生，子に干渉している間	一生懸命やるとなってしまう	あつという間，友人による	言葉悪い	上の子少4で自家中毒
129	幼稚園に入るまで	子どもが独立するまで	核家族，他児比較	どんだん外へ出るべき	子の心配（自閉的）	なし
145	幼児期，小学校入学まで	育児と同じ	若い母親がなる		第2子の偏食	特になし
155	中学まで	育児と同じ	母親の精神状態の病気		第1子の勉強	第1子の勉強
165			暇だから	色々な子どもをみる	子の落ち着きなさ，夫	夫，子どもの学校
166	3歳ぐらい	ずっと	集団の中で他児と比較で	あつという間にすぎてしまうよ	特になし	特になし
172	育児は終わったという感じ	子育ての実感がない	小さいことも気にする母親の性格	あつという間，自信をもって	夫	子の友人，勉強
210	高校卒業まで	育児と同じ	高学歴の母親が子に集中しすぎ	自分のための時間を	子が内弁慶	子の勉強のこと
244	幼稚園に上がるまで	育児に同じ	子の病気，母親の人間関係	時が解決してくれる	団地の人間関係，夫	近隣での人間関係
257	幼稚園の年長まで	育児も含めてずっと続く	社会やマスコミに自分を当てはめる	時が過ぎたら笑える	子離れが寂しい	子が大人びている
282	0～6，7歳	精神的・経済的独立まで	一般化された平均との違い	隣近所で友達作り	他児との比較	友人からの受験の情報
287	幼稚園まで	社会でって判断できるまで	他児との比較で「それが何」と思えない	本を信じない，自分の時間を	仕事つらい	子の鼻炎（少し）

（空欄は「無解答」）

(2) 「育児不安」とは？

これまで「育児不安」が規定してる期間について見てきた。では、「育児不安」の特徴としては、母親にどのように語られるのであろうか。母親たちに対して、「お母さん自身が考える育児不安とは何ですか。お母さん自身にとって育児不安とは何ですか。」とたずねたところ、「育児不安」の主な要因として、次のa～gがあげられた（該当するケース番号を記す）。

— 小学生をもつ母親がみる「育児不安」の要因 —

a 母親の要因：# 8，# 18，# 155，# 172

b 若い母親：# 145

c 育児・子どもへの傾斜しすぎ：# 122，# 210

d 専業主婦は暇だから：# 103，# 165

e 他児との比較：# 30，# 103，# 122，# 129，# 166，# 257，# 282，# 287

f 情報過多：# 5，# 6，# 115，# 257，# 282

g 母親の人間関係（母親の孤独）：#18, #30, #80, #145, #244

以下、a～gについて、aとbをまとめて①母親の要因、cとdをまとめて②子ども・育児への傾斜、eとfをまとめて③他児比較、gを④母親の社会関係とし、「育児不安」と「現在、育児不安に悩んでいる母親へのアドバイス」について母親の声を載せていく。

（複数の要因に該当するケースは、主に該当する要因の方へ載せる。）

①母親の要因

#8（パート勤務，3児，36歳）

*「育児不安」：

- ・自分は、（本当は言いたくないんだけど）つつい、子どもに対して口うるさく言ってしまう。そんなときは、口うるさく言う自分も嫌だし、言うことを聞いてくれない子どもに対しても嫌になる。

上の子は、何でもサッサとせずに丁寧に片づける（神経質）。でも、自分はパッパッとするのが好き。母と子の性格の違い、相性の違いで「育児不安」が生じるのかなと思う。

- ・社会的な（？）要因としては、前はアパートに住んでいたが、この地域は、一戸建て住宅が多くアパートは少ない。最初引っ越してきたときに、周囲の雰囲気（一戸建て多い）に対して、負い目みたいなものがあった。子どもどうしを見ていても、家に友達を連れてくる機会が増えるにつれて、狭くてかわいそうと思っていた。自分自身も、遊びに来た子どもから「階段はどこ？」とか「洗面所はどこ？（アパートでは流しで顔を洗う）」と聞かれて、気にしていた。狭くて、イライラしていた。

*アドバイス：

- ・誰でも、最初の子どもの時には神経質になってしまう。
2人3人産んでみて、経験がものをいうことが多い。
それなりにどうかなるよ…（アドバイスにならないかな？）
あと、お友達、子どもがいる友達をいっぱい作るといいかな…
- ・子どもや育児に対する、ストレスを解消するゆとりの時間をもつこと。
やっぱり、イライラを解消できるお金と時間があれば、育児不安にならないよね。

#18（専業主婦，1児，37歳）

*「育児不安」：

- ・2歳までは、子育てびっちりで、イライラしていた。シミ・しわ・白髪もあった。
でも、「あと一年、あと一年」と思って、いい方に考えてきた。
- ・母親がイライラとストレスを繰り返すのは、自分の心を自由にできないから。そうした余裕をもつには、母親の大人同士の付き合いが少ないから。昔は大家族だったけれど、今は核家族で、孤独感がストレスになる。
- ・他児との比較にしても、母親本人の気持ち次第。理屈っぽく完璧主義で、あれしなきゃ、これしなきゃと思うと不安になる。
- ・自分自身は、不安がなかった。やっぱり、自分をしっかりもっていたからだと思う。情報にも他の子との比較にも惑わされなかった。子育ては、自分の小さかった時のことを思い出せ

ば、習い事にしたって、自ずと詰め込まないはず。

*アドバイス：

- ・「完璧の壁」を打ち破ること。
- ・月に1度でも自分自身の時間をもつ。預け先の問題があると思うけれど、それぞれが見いだすしかない。

#155 (パート勤務, 3児, 44歳)

*「育児不安」：

- ・その人(母親)の精神状態の病気。
- ・家族関係も関連があると思うけれど、それよりも栄養のバランスが崩れているのだと思う。イライラするときには、カルシウム不足など。
(母親の実家が薬剤師のためか、あらゆる問題の根源を栄養・ビタミン不足で説明する)

#172 (専業主婦, 1児, 32歳)

*「育児不安」：

- ・その母親の性格だと思う。生活の中で小さいことを気にする性格。
- ・いろいろな雑誌も出ているし、全くその通りにしなければという人だと、育児不安になる。
- ・子どもの方も、夫婦喧嘩などがきっかけ→それを察知して反抗→母親の言うことを聞かなくなる→母親がイライラ。
反対に、例えば離婚して母子二人になれば、母親がしっかりしなければ→子どもも察知して→子どももしっかりする。
- ・自分は、子どもも未熟児で産まれたが育児不安はあまり感じなかった。保健婦さんから不安がないと言われた。

*アドバイス：

- ・自信をもって子どもに接する。
- ・すぐに楽になる。あつと言う間のこと。
- ・悩み…子どもが小さいときに、小さいことで悩むのも可愛い。

#145 (在宅にて教材添削, 2児, 38歳)

*「育児不安」：

- ・「公園デビュー」の話聞いても、若い母親がなるのかなと思う。
22・23歳で母親になって、自分のやりたいことと子育てとで焦りがでるのかなと思う。
自分は、29歳で母親になって、その前に遊びも一通りしてからの子育てだったから、子育ての最中は子育てに専念できた。
- ・母親と子どもと2人きりで外へでられないという現実があって、そんなとき夫が助けてくれると違う。他には、最近では、自分なんかも公共の場(プールなど)で小さな子どもを疎く思うことがあっていけないなあと反省することがあるけれど、子どもが小さいときには、赤ちゃんに対する周囲の目が気になった。社会で赤ちゃんを見守る(子どもに寛容になれる)目が必要だと思う。
- ・子育ての経験がない、子どもに触れたことがないお母さんだと、赤ちゃん一人一人がすべて

違うのだということがわからないのだと思う。自分は育児書に頼らなかったけれど、育児書を見るとかわいい赤ちゃんばかりが載っている。

若いお母さんで「自分の子どもは絶対正しい」と自慢して、自分の子どもの欠点をさらけ出せない母親がいる。そういう母親の子どもも、おかしな子が多いと思う。

②子ども・育児への傾斜

#122 (陶芸教室, 2児, 40歳)

*「育児不安」:

- ・母親が一生懸命やるとなってしまうと思う。
- ・他にも目を向けることが大切で、子どもばかり見ていると「育児不安」に入ってしまう。
- ・他の子と比較しても、不安になる。一人目の時は一人ずつ違うんだと思って不安になったが、二人目からはなくなった。
- ・周囲の助言が必要。

公園へ行っても友達づくりにくい。「仲良し子ども館」⁽¹¹⁾の廃止はよくないと思う。

「仲良し子ども館」を通して近所の同じ立場の母親と知り合えて、不安があっても、その人たちとしゃべるだけで気が紛れる。本を読むとかえって心配になってしまう

*アドバイス:

- ・あつという間にすぎるよ…
- ・通わせている幼稚園のカラーによっても違ってくる（それを選ぶのは母親だけれど）
周囲のお母さんたちが、一緒に遊んで子どもを育てていくような、昔の長屋のような雰囲気だと、そういう仲間が近くにいると、かえって自分の親よりも安心できる。
自分も、第1子の時には専門家へ相談し、理想的（現実的でない）回答だった。
第2子の時には、リアルタイムで子どもの友人の母親へ相談していた。
- ・アドバイスくれる友人を近所にもつこと。
子どもを預けても安心できるような友人を…

#210 (専業主婦, 3児, 37歳)

*「育児不安」:

- ・高学歴の方が真剣に思いつめる。頑張る母親は、自分の全てが子どもへと向いて、その子のことだけになる。（そうになると母親も子どももつらい…）
- ・自分の子どもには、あれもこれもと期待しすぎ。
- ・自分に余裕がないためになる。1人目→2人目→3人目と、時間的には大変だったけれど精神的には楽になっていった（余裕がでてくる）。
- ・自分の周囲のお母さんで、よくそこまで子ども中心でやれるなあ…と思う人がいる。
- ・自分はある程度、晩婚だったこともよかったのだと思う。人生経験積んできたし…
ヤングママは何も知らずに母親になっていた。

*アドバイス:

- ・子どもだけに集中しないで、自分だけの時間をもっと違うことに使う。

#165 (専業主婦, 2児, 39歳)

*「育児不安」:

- ・サークルや親戚の子など, いろいろな子どもを見た方が育児不安は減る。自分の子どもをもつ前に, いろんな子どもを見ていないと, 子どもが異星人に思える(結婚前は保母をしていた)。
- ・でも, 家の中で1対1でいれば, 子どもを知っていても大変。
みんなと話して, 「私もー」と聞いてホッとする。
- ・家族関係では, 夫が不在の休日にも子どもたちを連れて出かけたり, お金や時間を工夫して自分でも頑張っているのに, 夫が自分の頑張りを評価してくれないことが不満。
- ・現在の心配ごとを考えると, やっぱり暇だから不安が生じるのかなあと思う。
小学校からの帰りの時間が少し遅いと気になるが, これも私が働いていて, 子どもは学童保育に何かあったとしても帰っているもののだと思えば, 帰宅の時間は気にならないはず。家で, 子どもの帰宅を待ったりしているから, 気にしてしまう。

③他児との比較

#103 (専業主婦, 2児, 31歳)

*「育児不安」:

- ・保健所はなんやかんや言っても, 卒にはめようするから不安になる。
- ・みんな, 横の人と一緒にないとダメ。何かが流行るとそれをもっていないとダメ。
特に今は子どものファミコン。
親にしても個性的な人ほど嫌われる→他の人と合わない→不安へ。
男の人は, あまり他人と比べない。女の方は, 特に主婦は暇だったりすると, 外へむけて比較する。

*アドバイス:

- ・母親が社会へ出ようと思っても出られないようなサービスが悪い。自分は, 昔, 保育所のことで区役所の窓口とけんかした。
保育所に限らず, 美容室にしても子どもを連れて母親どうしで行けるところが少ない。
自由に預かってくれるところがほしい。半日で千円以内で。
- ・公園デビューについては, 子どもが楽しんでいれば, ムリしてデビューすることないよ。

#129 (在宅生活雑貨販売, 2児, 39歳)

*「育児不安」:

- ・今は, 核家族の時代だし, 聞いてくれる人がいないことが不安になっていると思う。
- ・育児不安というのは, 今思うと一つ一つが「チェ」と言うぐらい小さな, くだらないことだった。けれど, 当時は, すごく他の子どもが気になった。育児雑誌もよく読んだし, 公園へ行っても他の子と比較していた。他の子の方が早く歩くようになったとか, 積み木を高く積めるとか, もう少したつと字が読める・書けるとか…
今思えば, 「それがどうした…」という感じなのに, 当時はムキになって, 自分の子どもの自慢を試みたり, 気にして落ち込んだり…
- ・それに, 自分の子どもに対して, 「自分の子どもは特別だと思いたい」みたいな期待はあった。それで, 他の子どもより, ちょっとでも早くにできることがあれば, 自慢を試みたり…母親

自身が確認したいという気持ち。

それだけに、第1子に自閉的な傾向が現れたときにはショックが大きかった。

- ・子どもの全体像でみれば、子どもは、みんな輝いているのに、一つ一つの部分について目盛りを用いてはかって、比較して、気にしている。
- ・しかも、こうした悩みについて、それを後ろ盾してくれる人がいなかった（当時は、夫も親戚も友人も）から、孤独な状況で子に接して、私一人で子育てをやっているという気持ちになって、神経が過敏になったり、気に病んでいたりした。
- ・今は、そうした後ろ盾の必要性を感じているから、若い友人の子どもも1～2時間みてあげて、友人に買い物に行く時間を作ってあげたりしている。
- ・いまの社会は、全体的に「人に聞きたい」と言う要求が高いと思う。→でも聞けない。
- ・何でも、育児不安でも大げさにとらえすぎていると思う。
商業ベースに乗ってるなあ…という感じ。

*アドバイス：

- ・お母さん達は、家に閉じこもらないで、どんどん外へ出てくるべき。
- ・他人と関わることが、母親にとっても子どもにとっても、影響が大きい。
- ・苦手な他人もいると思うけれど、人を選んで、怖がらずに出ておいで…

#166（専業主婦，2児，39歳）

*「育児不安」：

- ・家の中だけで見ていた我が子が、集団の中でどうか？で生じる。
他の子を見ていて思うのは、一人っ子はやはり恵まれていると思う。その子が幼稚園へ行って、その子とは会わない子もいる集団の中へ、家から外へ出たときに親子ともにどうなるか、が一つの節目だと思う。

*アドバイス：

- ・あつと言う間にすぎてしまうよ。
- ・上の子が幼稚園に行っている時期には、下の子に手がかかって、よく見てあげられなかった。けれど、後から園長先生に「それは不安がなかったから、ほおっておけたのでは…」と言われて、なるほどなあと思った。

#257（在宅化粧品販売，1児，同居，48歳）

*「育児不安」：

- ・今は何でも、社会の風潮やマスコミの言葉を自分の生活に当てはめたがる。
子育てにしても、「こうゆう育児方法でなきゃだめ」と思いこんでしまうために、育児不安はおきる。
- ・今は、何を頼りに、どこに身をおいて生きていったらいいのかわかりにくい。
お金を出せば何でも手に入る分だけ、我慢ができない時代になっていると思う。
- ・子育ての時期は、社会的な活動もできないし、視野の狭ばるとき。
今思えば、「何であの時はあるなふうに思っていたんだろうと…」
- ・けれど、子育てしながら活動していればいいかといえ、それはそれで大変。
忙しくて、自分の子どもを見つめる時間もなくなってしまうし…

でも、それ（何か活動）をしていないと不安になってしまうんだと思う。

- ・自分は、公園で知り合えたお母さん達が自分と同じ考え方の人だったので、恵まれていたと思う。

*アドバイス：

- ・時が過ぎたら笑えること
- ・年を取ってくれば、おかしさに変わるようなもの

#282（フルタイム勤務，2児，40歳）

*「育児不安」：

- ・自分の思い通りに行かないと落ち着かず不安になる。特に子育ての場合，一般化された「こうした方がいい」とか，平均された「1歳児では～」といったものがあり，それに合致しないと不安になる。子どもにそってではなく，情報に照らし合わせて不安になっていた。現在の心配事も情報に振り回されていると思う（わかっているが振り回される）。

*アドバイス：

- ・友達を隣近所につくること…ちょっとしたきっかけでもいいから，人をたくさん求めて話に行くこと。
- ・自分の悩みと違う視点からの人と出会うと，一般化された情報とは違っている。
- ・周囲の人が「そんなことないよー」と言ってくれば，助かる。

#287（フルタイム勤務，2児，38歳）

*「育児不安」：

- ・今思えば，あのときの不安はわからない。
- ・他の子と比較（例えば，はやくしゃべれるようになったとか歩けるとか）しても，「それが何？」って今だと言える。これは，自分で納得するまでしょうがないのかな。
- ・でも，反対に他の人と比較して，他の人でも「こうゆう人がいるんだ」とわかって，ホッとしたこともあった。
- ・テレビで，子だくさんの家庭を見ると，気にしない母親だからできるんだと思う。反対に，子どもが少ないと子どものことが目に入りすぎて，目が行き過ぎてしまう。

*アドバイス：

- ・本を信用しない（特に，叱らないでのアドバイス→無理！）
- ・子どもばかり見ないで，自分を取り戻す時間を。24時間一緒にいると，不安になる。子どもと離れていたって，愛情はかけられる。
- ・びっしり専業主婦をしている人は，どうやってコントロールしているのかと思う。

#5（パート勤務，1児，同居，37歳）

*「育児不安」：

- ・今思えば，へのかっぱという感じ。
子どもも一個の人間で，赤ん坊でも個々の性格がある。だから，いくら育児書読んでもその通りになるわけがないのに，それがわからずに，不安が生じる。
「人は人，家は家」という考え方が，自分の場合は年をとってからの子どもだから，子ども

をもつ前に、いろいろな経験を積んできてわかったのだと思う。

- ・幼稚園へ行くと、母親同士の付き合いが広がって、情報交換もできて不安は少なくなる。

幼稚園へ行く前は、友人を作りにくく、自分で得た以外の情報は入らなかった。

*アドバイス：

- ・友達を作ること
- ・隅から隅まで、本を読んで信じないこと。人と話すと「こんなものだ」と思える。
- ・若い母親を見ていて、何かが欠けていると思う。自己中心的で他人のことを考えない（地下鉄の中でのマナーなど）。

6（専業主婦，2児，36歳）

*「育児不安」：

- ・今思うと笑ってしまうことが多い。
- ・育児の情報が多し。どれがよくて、どれが悪いかわからない。実際に自分の子どもに対して、それを自分で選択するのは難しい。
- ・社会的影響も大きい。小学校1年の子どもに流行っている「ストーカーごっこ」。子どもにも情報が誇大化して入っている。

*アドバイス：

- ・細かいことを心配してもしようがない。育児に神経質にならないで。育児雑誌は、細かいことばかり。自然に、情報に振り回されないで。

115（パート勤務，2児，36歳）

*「育児不安」：

- ・本当に小さなことでも不安になると思う。
- ・自分の親の世代だと子どももたくさんいたが、現代は子どもが少なし。そこへ情報が多くて、何歳までに何々をと早期教育に駆られる。
- ・第1子は人見知りで、今でも人に慣れないところがあるが、どんどん年が経てくれば（成長して行けば）普通になっていく。
今は、子どもの将来が見えないから、勉強不安がある。同様に、子が小さいときも先が見えないから育児不安になっていた。
- ・周囲（いとこや親戚）に同じ環境の人がいないため、先が見えない不安がある。

*アドバイス：

- ・幼稚園の時に、他の母親から相談されたことがある。「何でそんなことで悩むのかな」と思った。下の子が母親にまわりついて母親の時間がないという相談で、アドバイスのしようもなく「そんなものだよ。」という返答をした。

④母親の社会関係

30（専業主婦，2児，32歳）

*「育児不安」：

- ・話す、打ち明ける人がいなかった。
- ・それに、他の子も気になった。幼稚園の時に始めた公文も周囲の子どもよりも読み書きが遅

くて、小学校へ行って困るかなと思って始めた。

現在も、子どもの学校のことや子育てのことで、何かの時にどこへ相談したらいいのか、子どもを連れて行ける集まりなど、情報が全く入ってこない。

*アドバイス：

- ・一人で悩まないで…

#80（パート勤務，2児，同居，35歳）

*「育児不安」：

- ・不安って言えば、子育ては全て初めてのことから、全部が不安。

母親はどうしていいかわからない（データ・資料がない）→誰に話していいかわからない（特に熱出したり、吐いたりした時）→夫にも知識がないとムリ。

注）母親は、一人での子育てで育児不安になり、夫方両親と同居し、現在に至る。

- ・育児書も実際には意味がない。
- ・やはり、母親の孤立とストレス。そのストレスは、社会的なストレスだから社会的に発散するしかない。
- ・現在なら、経験を通して、新米ママにも教えられる。

*アドバイス：

- ・友達増やして、情報集める。
- ・自分の場合、公園デビューは初めてに人同士だったので、障害もなくためになった。

#244（専業主婦，2児，32歳）

*「育児不安」：

- ・私にとっては、子どもの病気だった。子どもが健康なときには自分も大丈夫だった。

育児は24時間体制だから、自分の時間がもてれば…

注）前回の調査でも、団地のネットワークでいじめに遭う。

ここへ越してきてからも、子どもの病気の時に、近所の協力が得られず、他人とは一定の距離を置いて接している。

- ・情報について…私は家にこもるタイプで、育児書も何冊も読んだ。そのときはなるほどと思うけれども、でもそのようにはできない。結局は自分のできる範囲で…。
- ・公園デビューは、私の時にもあった。今思えば、他にも遊ぶところはたくさんある。親同士のサークルもいいと思うが、作れるかが問題。親の中には、自分の子どもの悪いところは見て見ぬ振りをする自分勝手な人が多い。そういう人に限って、自分が被害を受けたときには、文句を言うてくる。

*アドバイス：

- ・時が解決してくれる。母親のモヤモヤの解消は、母親自身や周囲の努力じゃない。
- ・子どもの成長を待つしかないけど、また子どもが大きくなったらなったで、勉強面やいじめの問題が生じてくる。
- ・行動派の母親は別だけれど、小さい子がいる母親は、どうしても家にこもってしまう。そういう意味では、もっと子どもを連れて行ける安全な場所を提供してほしい。公園にしても自転車乗り入れ禁止で、でも、道路で自転車の練習をさせるのは危険だった。

公園で練習していたら、他の母親の目もあるし…

さて、こうした母親たちの意見は、先行研究において分類・構造化された「育児不安」のどこに位置するのであろうか。母親関連—子ども関連の軸で見ると、子どもの具体的な発達上の問題や育児のやり方がわからなかったために生じる不安よりも、子どもをもっている・育児をしているために感じる「母親の不安」が多く、その内容も、一定の範囲内では子どもの状態に左右されないものである。また、健康的な不安—積極的対応の必要な不安—医療的対応の必要な不安の軸で見ると、「母親の要因」の一部に医療的対応の必要な「不安」を取り上げている母親がいたが、大多数が「健康的な不安」を問題としていた。それはまた、「現在、育児不安に悩んでいる母親へのアドバイス」を概観しても、「医者・保健婦に相談すべき」といった専門家の対応を必要とするアドバイスは見られず、多くは「育児仲間・友人」を見いだすことや「時が解決」に集約されている。

(3) 「育児不安」の解消過程

これまでみてきたように、母親が問題とする「育児不安」とは、子育て全体の中では子どもが乳幼児の時期にある（育児期の）母親の健康的な範囲での不安であった。ここでは、母親たちの、これまでの「育児不安」の解決策を振り返り、どのような援助が母親たちの「育児不安」を「たいたことないもの」へと感じさせるにいたったのかを考察していく。これまでの先行研究から、「育児不安」に関連する要因として、「夫の協力や理解」、「母親の社会的な活動」、「母親のネットワークの充実」、などがあげられており⁽¹²⁾、それらは「育児不安」解消の手だてともなりうる。その中からここでは、特に母親の社会関係を中心に考察していく。

母親に育児上の悩みや不安が生じて、同じように育児をしている母親と話し合うことで、その不安は小さく、あるいは解消される場合も少なくない。そのことは前項の中で、母親たちの「現在「育児不安」で悩んでいる母親たちへのアドバイス」として「友達・仲間作り」が多くあがっていたことから言える。4年前の調査においても、育児の中で生じてきた様々な問題について、自らのネットワークを広げて、その中で解決していった「ネットワーキング」の母親たちとは対照的に、多くの問題や悩みが解決されずに先送りされることが多かった「問題未解決」の母親たちが存在した⁽¹³⁾。今回の調査に承諾してくれた中に、その「問題未解決」であった母親が2ケースあり、その母親たちがどのようにして「育児不安」を解消していったかについて検討していく。前回、これら2ケースに共通して、「母親の不安」が高く、ネットワークも小さく、また、サポーターが夫や親族によって占められているという特徴があった。

最初のケースは、当時の居住年数も2年目と地域でのネットワークが成立していたはずであった母親が、第2子の出産・育児で家にこもることが多くなったのを契機に、孤立してしまったケースであった。4年前の状況について、母親のもっているネットワークを中心に記す。

#244

【夫：37歳（団体等職員）、本人：32歳（専業主婦）、子ども：6歳♂、4歳♂】

～4年前の状況～

・居住年数：2年、市営団地、核家族、年収：300～500万円未満。

- ・親族のネットワーク：自分の母親、夫の母親は、ともに札幌から100km以上離れた道内に住んでいる。お盆やゴールデン・ウィークなど年に2・3回、子どもの顔を見せに帰っている。自分も夫も父親は幼いときに死去しており、いない。
兄弟は、姉が3人、弟が1人いる。姉1、姉2は市内に住んでおり、姉3は実家近くに住んでいる。姉1～3とは、個人的な悩みも相談でき、子連れでの行き来もある。最近、姉に下の子が生まれたので、出歩かない。
- ・Personal ネットワーク⁽¹⁴⁾：実家に帰ると必ず会う友人が1人いる。
- ・Maternal ネットワーク⁽¹⁴⁾：同じ団地内に数名おり、以前はお互いの家に行って遊ぶこともあった。今は、1名だけ、個人的な話もでき、上の子を病院（アトピー）に連れて行くときに、下の子を見てもらっている。この友人は頼りにしているが、裏切られる。
- ・家族ぐるみの付き合い：子どもが生まれる前はあった。母親は、家族ぐるみでつき合える友人がほしいと思っているが、夫の仕事のスケジュールが平日休みなので難しい。
- ・地域の環境：市営住宅に住んでおり、同じ建物内に同年令の子どももたくさんおり、見かけ上は地域のネットをもっているように見えるが、第二子を出産して家にいる間に、グループから外されていた。親同士が仲良くならなければ、子ども同士も仲良くなれないと思うから、新しい友達をつくってあげなければと思っている。親族ネットは、姉3人と実母をもっているが、姉も子どもを出産したばかりで動けず、それよりも団地からの疎外感のダメージが大きい。
- ・育児以外のストレス：夫には、子どもとずっと接してほしい。休みの日も家でゴロゴロしている。夫も父親のモデルがなく、どのように接していいかわからない。子どもも母親にしかあつかず、悪循環。
- ・母親の趣味活動：やりたいことはあるが、何もしていない
- ・サポーターとして支えになった key persons：姉1、姉2、実母
- ・嫌な思いもさせられる人：近所全般。他には、夫。
- ・母親が支えとなってあげている人：夫

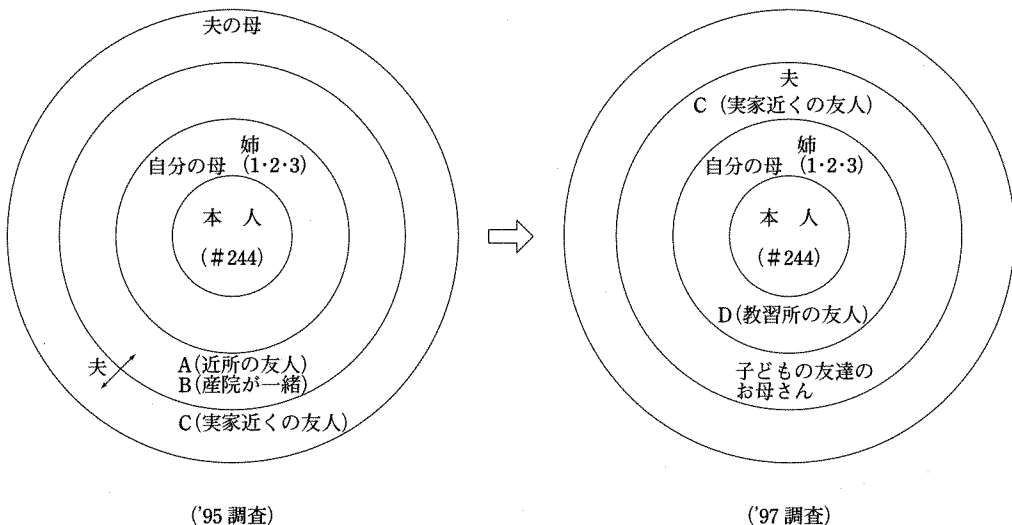


図1 母親のもつネットワーク（#244）

この母親にとって4年前の「育児不安」は、子どもの病気がちであった状況で、親族のネットワークは実質的に利用できず、夫や地域でのサポートも得られなかったことにあったが、それをどのようにくぐり抜けてきたのであろうか。

～現在の状況～

- ・前回調査からの、生活上の大きな変化：3年前に一戸建て住居（持ち家）へ転居。
 - ・母親のネットワーク（図1⁽¹⁵⁾）：前回と比べても、ネットワークはさほど広がっていない。以前の近所の母親と産院が一緒であった友人は、図からは外され、新しい近隣での Maternal な友人が書き加えられている。また、Personal な友人としては、教習所で知り合った友人が、第一円に加わっている。
 - ・近隣について（母談）：前回、団地での関係でひどい目にあっているのもう、心を開いて友人を作る気はない。学生時代と違って、大人になってから本当の友人は無理かなとも思う。ここへ引っ越してきてからも、私がダウンしたときに、子どもを病院へ連れていけず、やむなく隣の人に頼んだ。でも、「明日はどうするの?」といった、あちらからの継続的な声かけもなく、自分としても頼みにくくて頼めない。
- 今は、車の教習所で知り合った年上の友人と電話でよく話す。お互いの子どもの年齢も違って、かえってつきあいやすい。彼女からのアドバイスもあり、近所だと、こじれたときのことを考えると大変なので、深くつきあわない方がいいと思う。
- また、専業主婦をしていると、近所の人から「日中ヒマで何をしているの。」とか声に出して言われる（それもあって、ここでも引きこもりがちとなる）。自分としては、もちろん、経済的にも大変で働こうとは思っているけれど、最近まで姉の子どもを預かっていたりで、最近やっと、ホッとしている所で、今はボーとしていたい時期。確かに何もしていないけれど、今の私はこの時間を楽しんでいるので、他の人に色々と言われたくない。
- ・夫について（母談）：夫は、今も非協力的。子どもが小さいときには、私も夫に対して要求を多く出した。今は、私が諦めた分、夫婦関係はいいのかも…
 - ・現在の子どもについての悩み：ない。
 - ・現在の子育て以外の悩み：夫の収入が減って、経済的に大変。

このケースの場合、母親を悩ます地域での環境は、転居しても生じてしまい、地域における子育て仲間・友人はいない。教習所で知り合えた Personal な友人が、愚痴を聞いてくれているが、あとは、母親自身が自分で精神的に解消するしかなかった。夫の要因についても、この4年間で夫が協力的になったというわけではなく、母親が「諦め」という形で解消している。

ここで、「育児不安」のサポーターとしての「夫の要因」についてふれておく。4年前の調査において、「育児不安」に夫の要因が関連していたケースは、今のケースを含めて#165、#172、#244の3ケースが該当した。#165と#244は、夫の協力が得られないケースであり、#172は夫は協力的であるが母親の夫への評価が低いケースであった。これら3ケースともに、夫の実際の協力や関わりには、4年間で変化が見られず、現在も#165と#244の夫は、「子育ては母親任せ」と非協力的であり、#172は自分の子どもだけではなく近所の子どもも含めて子守をしてくれるほどに協力的である。しかし、母親の夫に対する評価については、#165と#244ケースは「諦め・

期待しない」へと変化することで、また、#172は夫への肯定的な評価がみられ、結果として3ケースともに、夫への不満としてはあがってこなくなっている。これらの場合、「育児不安」解消のために「夫の協力や理解」を求めるということは、単にそれぞれの夫婦仲の良し悪しに還元されてしまうのではないだろうか。もちろん就業システムの改善も含めて、男性の家事・育児への価値観を再評価してもらおうという意味では、「育児不安」における「夫の要因」を強調することは重要であるが、個々の家族・母親にとっては、それ以上のものとはならないと思われる。

さて、「問題未解決」であった母親の2つ目のケースは、当時、引っ越してきたばかりで地域から孤立していたケースである。

#30

[夫：34歳（民間勤務）、本人：32歳（専業主婦）、子ども：3歳♂、1歳♂]

～4年前の状況～

- ・居住年数：0年，集合住宅，核家族，年収：500～700万円未満。
- ・親族のネットワーク：自分の両親は札幌から100kmを越えた道内に住んでおり，ゴールデン・ウィークやお正月，お盆に帰る程度で，用がないのに行くという感じではない。
独身の兄が，親と同居しているが，個人的な話はしない。子どもをもっている妹もいたが，現在は，死亡していない。本ケースの母親が妊娠中は，この妹の妊娠期を見て学習していたので，助かった。
夫の親は，札幌から100km以内の所に住んでおり，月に1回程度，夫の親が寂しくない程度には会いに行っている。
- ・Personal ネットワーク：昔の職場で知り合った友人とは，今でも続いており，その人には個人的な話もできる。前に住んでいた所での友人とは，今は手紙のやりとりをしている。日常的に交流できるネットワークはない。
- ・Maternal ネットワーク：団地の隣人とは，公園で話したりするがお互いの家に行ったりすることはない。「仲良し子ども館」⁽¹⁶⁾がいいよ，というアドバイスをもらって参加したが，その結果（ママさん先生の活動が辛くて）流産した経験もある。
- ・家族ぐるみの付き合い：夫の仕事関係の家族とは，たまに一緒にご飯を食べる。
- ・地域の環境：大きな市営団地，居住してきた年数も浅いためか，公園ジプシーの経験あり。公園に行って話しかけても，グループができていて入れてくれなかった。近所の人も，対個人では挨拶をしてくれるが，集団となると知らん顔をされる。子どもも，部屋でテレビ付けの生活となり，話し言葉が不明瞭。本児に関しては，来年から幼稚園を考えている。
- ・育児以外のストレス：姑に対して不満あり。おもちゃをたくさん送ってきて部屋がおもちゃであふれていて，片付かない。
- ・母親の趣味活動：とくにない。
- ・サポーターとして支えになった keypersons：夫，前の住居での友人，昔の職場の同僚。
- ・嫌な思いもさせられる人：姑，近所付き合い。
- ・母親が支えとなってあげている人：昔の職場の友人。

この母親にとっての「育児不安」の要因は，新しい環境での地域からの疎外感と，姑の問題で

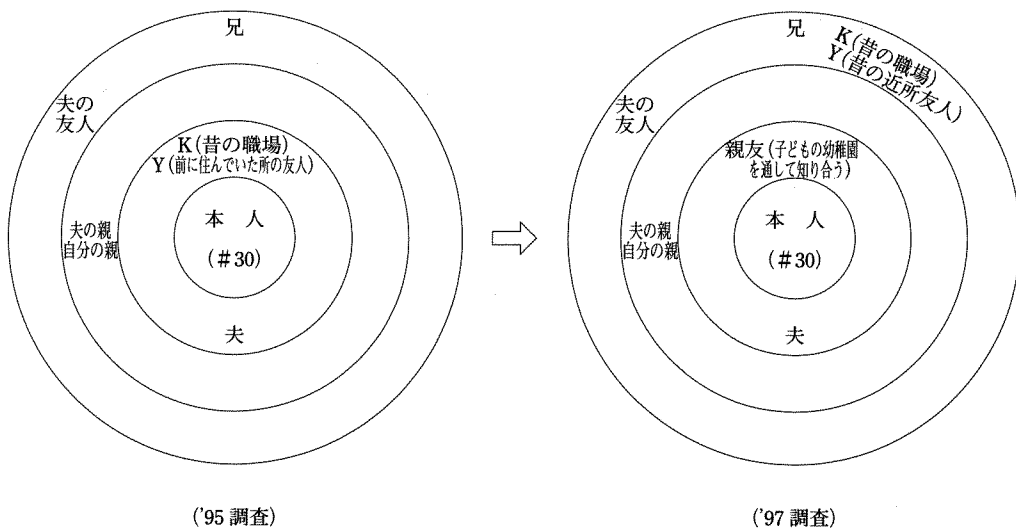


図2 母親のもつネットワーク（#30）

ある。子どもの言葉の状態は、室内で母親と1対1で過ごす時間が多く、子どもにとって他者からの話しかけよりも、テレビ・ビデオを相手に過ごす時間がかなり多かった（朝から晩まで）ためと思われる。また、母親自身、他の子どもと比較して、周囲と同じレベルにしたいという気持ちがあった。夫は仕事が休みの時や、母親が病気の時には、子どもの面倒を見てくれて、母親の夫に対する不満はない。

～現在の状況～

- ・前回調査からの生活上の大きな変化：第2子の出産。
- ・母親のネットワーク（図2）：前回と比べ、職場の友人Kと前に住んでいたところの友人Yが第3円へと遠のく。第1円には、新たに上の子の幼稚園を通して知り合えた友人が加わる。
- ・Maternalな友人について（母談）：第1子の年齢が一緒で、第2子も似たような年齢にある友人が1人だけできた（インタビュー中にも友人から電話が入り、話し込んでいた）。ただ、その友人も子どもが病気がちなため、大変だと思う。
- ・近隣について（母談）：仲のよい友人としては、上記の友人だけれど、年月とともに団地内でも、それほど深くはないが友人はでき、前のように嫌な思いは減った。
- ・現在の子どもについての悩み（母談）：上の子は、友人関係で大丈夫が心配。あと、強いて言えば、朝から晩までよくしゃべること。下の子は喘息。

上の子は、周囲の子に比べて読み書きが遅かったので、小学校へ行ったら大変だと思い、小学校へ行って困らないようにと「くもん」をはじめた。プールも、母親自身も「かなずち」だし、子どもも幼稚園の時から泳げなかったの、小学校へ行ったらプールの授業があるので、2年前から始めた。

自分では、子育ての情報をどこから手に入れてよいのかわからず、困る。将来的に上の子の友人関係とかで困ったときに、どこへ相談したらいいのかわからない。

- ・子育て以外の悩み（母談）：おもちゃを送ってくる件については、夫から姑に言ってもらって解決したが、姑のことで悩みはある。けれど、姑も夫を頼っているので、こちらから行くようにしている。

このケースは、前回転居したばかりで地域から孤立した状態にあったが、年月とともに団地内の人間関係は緩和され、また、同年齢の子どもをもつ母親と知り合えたことが、母親の孤独感を払拭している。しかし、他の子と比べて「先取り」してしまう不安・心配は現在も生じている。この「不安」に対する解決は、Maternalな友人をもっても解決されず、育児産業が提供するサービスを購入することで解決を図っている。

ところで、先の#244ケースと#30ケースのネットワークを比較してみると、ともにコンボイの図における第1円に新たな友人が加えられ、その友人が現在の母親のKey Personとなっている。#244は、「お互い子どもの年齢も違って、かえってつきあいやすい」という言葉にあるように、あえてPersonalな友人をもつことによって同年齢の子をもつ親同士のストレス（他児との比較）は軽減されるが、日常的に子どもを預け合ったりする関係は築きにくく、子どもの病気の時には手だてがない。一方、#30ケースは子育て上の小さな出来事についても意見交換できるMaternalな友人ができて、母親の孤立感を乗り越えさせてくれたが、Maternalな友人をもっても解決できない、また時にはMaternalな友人をもつことで新たに生じてしまう不安も存在していた。

さらに、両ケースに共通している解決策として、専門家がかかわってアドバイス・解決した経緯は見られず、母親自身のやりくりだけで乗り越えてきたことがあげられる。結局のところ、「育児不安」の解消としては「育児の仲間や友人をつくって、くよくよ悩まない」に還元され、その「仲間づくり」に対して公的サービスが提供しているプログラムは利用されていない。これまで見てきた不安の「解消」過程は、単なる「解消」であって根本的な「解決」ではないことがわかる。反対に、一定の階層の母親に顕在化されている「育児不安」とは、「友人・仲間をつくること」や母親の「気のもちよう」で解消されうる程度のものであるともいえよう。では、なぜ今「育児不安」が取りざたされ、何が母親たちを「育児不安」へと追い込んでいるのであろうか。

そこで次節においては、「夫」や「母親のネットワーク」をもっても、問題として残されてきた「他児との比較」を通して「育児不安」を考えていく。

4. 「育児不安」の社会的性格

これまで、「育児不安」の特徴について、母親たちの声をもとに考察してきたが、ここで「育児不安」が生じる社会的な過程について仮説的に組み立ててみる。

母親が「社会的に孤立しがちで、母親だけに責任が集中しやすい」という現代の育児を担っていく時、氾濫している情報や知識の中では、「他の子どもや他の母親の育児との比較」をしていくことでしか「育児の標準（スタンダード）」は見いだせない。しかし、その「標準」は母親の「期待」とも重なって、常に上昇傾向にある。その結果、他の母親や他児との比較には「これで十分」というゴールはなく、母親たちを慢性的に「育児不安」という意識状態へ追いやっていく。その「育児不安」にしても、大部分は「育児仲間や友人」との話し合いの中で緩和されるのものであった。しかし、時には悩みを共有できるような友人をもてなかったり、相談をしてもかえって混乱や比較を強めることとなり、再び、その回答を情報や商業的サービスに求めるという悪循環をもたら

す。こうして「情報や育児・教育サービス」と「他児との比較」とを往復しながら、益々「不安」を高める方向へ上昇していく螺旋階段のような構図（図3）が考えられるのではないだろうか。そこでの「夫」や「友人づくり」といった要因は、階段を上るスピードを弱めたり、数段引き戻す効果はあっても、母親の育児・子育ては「標準」へ向かって上昇し続ける。

子どもが乳幼児である「育児」の段階では、その比較する内容も「他の子の方が早く歩くようになったとか、積み木を高く積みめるとか、もう少し経つと字が読める・書けるとか…（#129）」

といった初歩的なものが多い。こうした差異は、多くの場合、「どんどん年が経ってくれば（成長して行けば）普通になっていく（#115）」ものである。しかし、子どもの成長とともに「子育て」の段階へ入っていくと、成績という目に見える形の競争を伴って、「他児との比較」や「子育て不安」は強く現れてくる傾向にある。「育児不安」は、こうした子育て競争における不安が前倒し的（年齢が若い段階へ）に覆い被さってきている現象であるとも考えられる。

「他児との比較」と「育児不安」との関連は、4年前における質問紙調査においても表れており、他児との比較が頻繁である母親ほど、「育児不安得点」は高かった。さらに、その「他児比較」は、母親が抱く子どもへの期待とも関連していた。当時、3歳児をもつ母親が就学前までに「習わせたい」習い事を記してもらったところ、「他児比較」をする母親の方が、希望する習い事の数が多かったのである。ここから、母親の発達期待（希望の習い事の数）が、他児との比較を通して、育児不安へと関連していると推測され⁽¹⁷⁾、この結果は、今回提出した「育児不安」が生じるプロセスについての仮説とも一致する。

子どもを育てていれば、わが子に対して、このように育ててほしいという期待や願望を抱くのは当然の感情である。しかし近年では、そうした期待が母親個人の期待というよりも、母親の外側から作り出されたものといった方が実状に近く、母親たちは否が応でも、他児との比較をしてしまう状況にある。この領域は、育児・教育産業のマーケットとして、かなり大きなシェアを占めており、実際にテレビや新聞・雑誌でのコマーシャル、さらに幼児のいる家庭へのダイレクトメールで送られてくる早期教育や育児サービスの案内には、母親を早期教育や育児サービスへとかきたてる内容であふれている。中でも、早期教育に関しては、その可能性に懐疑的・否定的な立場からの警告⁽¹⁸⁾が言われているが、ただ反対するのではなく、それらの可能性や問題点について慎重に吟味する必要性⁽¹⁹⁾や、日本の幼稚園教育と小学校教育との特性の問題⁽²⁰⁾も指摘されている。実際、今回の調査において子どもの習いものの現状を見ていくと、20ケース中、17ケー

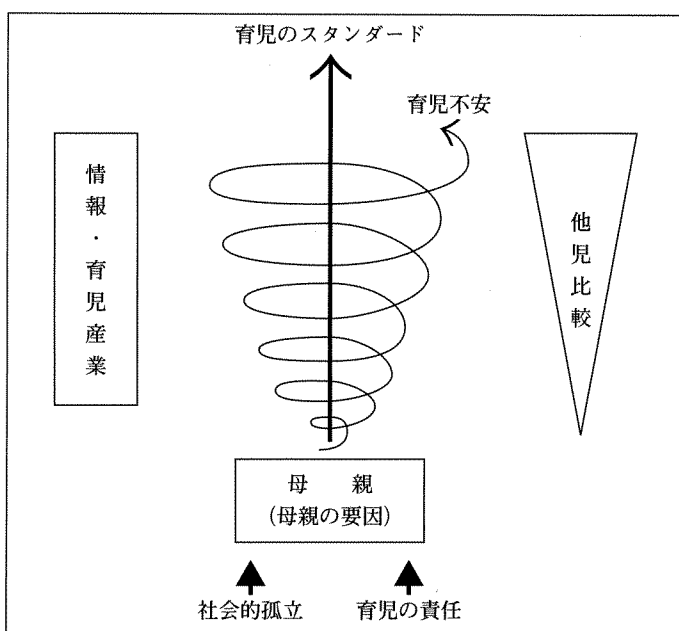


図3 「育児不安」のプロセス

スが何らかの習いものをしていた(表3)。これは、4年前に習いものを始めていたケースが5ケースであったことと比べると、この数年の増加は著しい。しかも、それが、単数ではなく、複数の習いものを実施していることが特徴としてあげられる。この現実、先にあげた4年前の291人のデータからも示唆されている。4年前の質問紙調査においてたずねた「子どもに現在どういう習い事をさせているのか」、また「就学前までに何を習わせたいと考えているのか」の結果、スポーツを始めとして、学習や通信教育、その他の幼児教育を含めると30.2%の母親が3歳の時点で何らかの習い事を始めさせており、それが「就学前までに習わせたい」になると80.1%へと一気に増加していた(表4)。こうした母親の期待は、母親個人に即して言えば、「人に遅れをとらないように…」という、子どもを“想って”生じる「子育て不安」の前倒しの傾向である。しかし山下の指摘にもあるように、社会の側から特に産業の側に立てば、これは、子どもが大事にさえているのではなく、子どもが一種の「商品」としての意味をもちはじめたに過ぎない⁽²¹⁾。こうした育児産業の流行について、子どもの社会化との関連で説明しているのが汐見であり、彼は子どもの社会化を、生まれたあとの家庭での養育による「一時的社会化」と家の近所での遊びや近隣の間人間関係、さらに家の仕事などに加わることによる「二次的社会化」、そして、学校に行って制度化された教育を受けることによる「三次的社会化」という3つに分類し⁽²²⁾、二次的社会的変化によって家庭養育機能の負担が増えたことが、商業的支援である育児産業を流行らせるとしている⁽²³⁾。

けれども、商業的支援の内容は、今や早期教育に代表される「子どもの知能・才能」を伸ばす

表3 習い事の比較

No.	前回の習い事	今回の習い事
5	(なし)	プール, 学研
6	(なし)	習字, 英語, チャレンジ
8	水泳	水泳・ワーク
18	(なし)	(なし)
30	(なし)	公文, プール
80	通信教育, スポーツ	習字, 絵
103	(なし)	サッカー, 学研
115	(なし)	ピアノ, 習字
122	(なし)	水泳, 学研
129	(なし)	エレクトーン, ワーク
145	(なし)	習字, 体操, 陸上
145	(なし)	ピアノ, そろばん, 英語, 算数
165	プール	英語, ピアノ, ワーク
166	体操	水泳, 剣道, 公文
172	七田式	ピアノ, サッカー, テニス, 習字, 英語
210	(なし)	水泳
244	(なし)	(なし)
257	(なし)	(なし)
282	(なし)	バイオリン, 野外活動
287	(なし)	体操, 空手, プール, チャレンジ

表4 習い事の実際と希望の数
(’95調査)

	質問紙調査対象者(291名)	
	習っている数	習わせたい数
0個	203(69.8%)	58(19.9%)
1個	67(23.0%)	125(43.0%)
2個	14(4.8%)	87(29.9%)
3個	7(2.4%)	19(6.5%)
4個	0(0.0%)	2(0.7%)

ことに終始しておらず、母親のニーズに応えるという名目で（実際にはニーズを作り出していても）、衣食住という育児・生活の基本的な部分にさえも「支援」が行き届いてきている。これは、汐見のいう三つの社会化になぞらえて見ていくと、「二次的社会化」だけに限らず、「一時的社会化」に対してまでも、商業的支援が浸食してきている状況であると考えられる。これまで、塾通いに代表される学歴競争において、すなわち「三次的社会化」の領域において商業的支援が家族の教育機能を代行してきていることは言われている。しかし、それが「二次的」・「一次的」社会化の領域においても商業的支援に代行されてきており、それを後押ししているのが、「育児不安」の社会問題化ではないだろうか⁽²⁴⁾。

最初で前提としたように、今回の対象者となった母親たちは、保健所での3歳児健診に出向き、アンケートを送付し、縦断的な面接調査にも応じてくれた母親たちであり、すでに「育児不安」を意識している母親たちである。しかし、それ以前に、客観的には子どもの発達や子育てに問題があっても意識にのぼらない・意識している余裕がないという母親たち、あるいは病院で健診を受けるのでもなく保健所の健診にも現れない親たちもいる。こうした親たちを含めて考えると、やはり本稿での対象者はかなり限定された対象であるといえる。けれども、育児における母親の問題が社会的に取り上げられるときには、今回の調査で対象となった階層の母親たちに代表される場合が少なくない。すなわち、本稿で取り上げたような「育児不安」をもって、育児の問題の本質とされることが多いのである。もちろん、夫のサポートや電話相談をはじめ、顕在化された「育児不安」への様々な育児支援については、その重要性を否定するものではない。しかし、「育児不安」が解消されるだけで育児や子育ての問題が解決されるものではないことを改めて認識し、今後の課題としては、「育児不安」として感じなくとも、「育児困難」として問題を抱えている母親たちへの保障を中心に考えていくことがあげられる。またこれは、子どもの立場からみれば「子育ての保障」でもあり、こうした社会的に弱い・潜在化している立場にある親や子どもを視野に入れて初めて、社会全体の育児支援の基盤が考えられると思われる。

——注・引用文献——

- (1) 牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞」『家庭教育研究所紀要』第3号、1982年。
 牧野カツコ「働く母親と育児不安」『家庭教育研究所紀要』第4号、1983年。
 牧野カツコ・中西雪男「乳幼児をもつ母親の育児不安——父親の生活および意識との関連」『家庭教育研究所紀要』第6号、1985年。
 牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安」『家庭教育研究所紀要』第9号、1987年。
 牧野カツコ「＜育児不安＞の概念とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究所紀要』第10号、1988年。
- (2) 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則「育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連」『心理学研究』第64巻・第6号、1994年。
- (3) 岩田美香「育児期の母親の不安とソーシャル・ネットワーク」『北海道大学教育学部紀要』第68号、1995年。
- (4) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也「育児不安に関する基礎的検討」『日本愛育研究所紀要』第30集、1994年。
 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也「育児不安に関する臨床的研究——幼児の母親を対象に——」『日本愛育研究所紀要』第31集、1995年。

川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也「育児不安に関する臨床的研究(3)——育児不安の本態としての育児困難感について——」『日本愛育研究所紀要』第32集, 1996年。

- (5) 庄司順一「育児不安に対する援助」久常筋子・島内節(編)『地域看護講座6・母子地域看護活動』医学書院, 1994年。
- (6) 本村汎・磯田朋子・内田昌江「育児不安の社会的考察——援助システムの確立にむけて——」『大阪市立大学生生活科学部紀要』第33巻, 1985年。
- (7) 岩田美香「『育児不安』研究の限界——現代の育児構造と母親の位置——」北海道大学教育学部教育計画研究室『教育福祉研究』第3号, 1997年。
- (8) 岩田は前掲書において, 子育てにおける「不安」だけではなく「困難」をも説明するために, 現代社会特有の問題と階層的差異の問題とを考慮した新たな分析枠組みを提出した。岩田美香, 前掲書, 1997年。
- (9) 最初の質問紙調査の291名から今回の20名へと, 母親の特徴の変遷を示すと次のようになる。

		質問紙調査対象者 (291名)	面接調査('95)対象者 (44名)	面接調査('97)対象者 (20名)	
母親の平均年齢		データ無	30.5歳	33.7歳 ('95での年齢)	37.3歳 ('97での年齢)
母親の 学歴	中 卒	12(4.1)	1 (2.3)	0 (0.0)	
	高 卒	159(54.7)	20(45.5)	10(50.0)	
	短大卒	92(31.6)	16(36.4)	6 (30.0) 含専門学校	
	大 卒	27(9.3)	7 (15.9)	4 (20.0)	
	N. A.	1 (0.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	
母親の 職業	フルタイム	21(6.8)	4 (9.1)	2 (10.0)	2 (10.0)
	パート	19(6.2)	2 (4.5)	1 (5.0)	5 (25.0)
	内職・自営	26(8.4)	3 (6.8)	5 (25.0)	4 (20.0)
	専業主婦	242(78.5)	35(79.5)	12(60.0)	9 (45.0)
				('95での職業)	('97での職業)
年 収	200万円未満	3 (1.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	～300万円未	14(4.8)	4 (9.1)	3 (15.0)	1 (5.0)
	～500万円未	114(39.2)	13(29.5)	3 (15.0)	6 (30.0)
	～700万円未	95(32.6)	17(38.6)	10(50.0)	9 (45.0)
	～1000万円未	48(16.5)	8 (18.2)	3 (15.0)	2 (10.0)
	1000万円以上	9 (3.1)	1 (2.3)	0 (0.0)	2 (10.0)
	N. A.	8 (2.7)	1 (2.3)	1 (5.0)	0 (0.0)
				('95での年収)	('97での年収)
夫の 職業	自営業	30(10.3)	6 (13.6)	2 (10.0)	
	公務員・団体等	57(19.6)	10(22.7)	5 (25.0)	
	民 間	181(62.2)	24(54.5)	11(55.0)	
	その他	16(5.5)	4 (9.1)	2 (10.0)	
	無職	1 (0.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	N. A.	6 (2.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	

- (10) 久富善之『競争の教育』労働旬報社, 1993年。同『豊かさの底辺に生きる』青木書店, 1993年。
- (11) 「仲良し子ども館」とは, 札幌市が独自に昭和35年からはじめた公的な幼児の集団活動の場である。札幌市内に住む満3歳から就学前の子どもを対象とし, 幼児の健康づくりや地域での仲間づくりを目的とした母子ともに参加する活動のことである。しかし, 平成9年から廃止となった。
- (12) 牧野, 前掲書, 1982年。本村他, 前掲書, 1985年。岩田, 前掲書, 1995年。
- (13) 詳細は, 岩田, 前掲書, 1995年参照のこと。
- (14) Personal ネットワーク・Maternal ネットワークとは, Jennings, Stagg, and Connors の分類を参考にしたものである。Personal ネットワークとは, 母親の学生時代や元あるいは現在の職場の友人など, 母親役割に関係なくできたネットワークのことであり, Maternal ネットワークとは, 産院や母親学級で知り合ったり, 子どもの幼稚園・学校を通して知り合ったというように, 母親としての立場を通してできたネットワークのことである。同様に, それぞれのネットワークでの友人を Personal 友人, Maternal 友人と用いる。

Jennings, Stagg, and Connors (1991) Social Networks and Mothers' Interactions with Their Preschool

Children CHILD DEVELOPMENT, 62.

- (15) 図1および図2は Kahn & Antonucci のコンボイ (convoy) モデルを参考にした図に、母親のもつ親族・友人等のネットワークの中で、その人が母親からみて心理的にどれだけ近い、遠いを書き込んでもらったものである。

Kahn らのいうコンボイ概念とは、Bowlby の愛着理論をもとに、それを個人の一生を通じての対人相互作用にまで拡張したものである。ライフ・コースを通じて変化するソーシャル・サポート・ネットワークを「個人の護衛隊 (コンボイ)」と呼び、個人を中心とした同心円構造としてモデル化している。さらに、その第1円に属するメンバーは、「様々な状況で支えを提供することができる」としている。

Kahn, R. L. & Antonucci, T. C. (1980) Convoys over the Life Course: Attachment, Roles, and Social Support. LIFE-SPAN DEVELOPMENT AND BEHAVIOR, VOL3. (遠藤利彦訳「生涯にわたる「コンボイ」愛着・役割・社会的支え」東洋・柏木恵子・高橋恵子 (編集・監訳) 『生涯発達の心理学2 巻気質・自己・パーソナリティ』新曜社, 1993年。)

- (16) 注11に同じ。

- (17) 詳細は岩田, 前掲書、1995年, および岩田美香「育児期の母親の心理および生活とソーシャル・ネットワークの活用」北海道大学教育学部修士論文, 1994年参照のこと。

- (18) Elkind, D. (1987) MISEDUCATION Alfred A. Knopf, Inc. (幾島幸子 訳『ミスエデュケーション』大日本図書, 1991年。)

保坂展人『ちょっと待って! 早期教育』学陽書房, 1996年。

斉藤茂男『お子さま戦争』草土文化, 1994年。

- (19) 汐見稔幸『このままでいいのか超早期教育』大月書店, 1993年。

- (20) 藤永保『幼児教育を考える』岩波書店, 1990年。

- (21) 山下恒男『子どもという不安』現代書館, 1993年。

- (22) この三つの社会化は段階論ではなく、同じ時期に平行して関連をもちながら機能するとしている。

汐見稔幸『幼児教育産業と子育て』岩波書店, 1996年。

- (23) 汐見は、育児支援についても行政的支援・市民的相互支援・商業的支援とに分類し、育児産業が流行る理由として、二次的社会化の条件の変化に加えて、行政的支援と市民的相互支援が必要水準に比べて立ち後れていること、少ない子どもに「ていねいな」教育を施したいとするわが国に特殊な教育・育児環境もあげている。汐見, 前掲書, 1996年。

- (24) 「不安」が産業の対象となることは、竹内が、「心身」の不安が強くなればなるほど、巨大な市場ができあがり、「不安産業」とでも呼ぶべき分野が組織され、不安の産業化が進展していくとしている。竹内真澄「現代の不安と救い」飯田哲也・浜岡政好『人間性の危機と再生』1988年。

また、上野は、「言説の方が問題を作り上げていく」という仮定にもとづき、児童虐待問題「論」を展開しており、現代の児童虐待問題の性格づけが、経済的要因が薄められ、問題が医療対象化してきていることを指摘している。上野加代子『児童虐待の社会学』世界思想社, 1996年。

今日の「育児不安」の社会問題化についても、子育て問題の性格づけとしての経済的要因が薄められ、母親の心理的側面に注意することにより、問題の表面的な解決が育児サービスへと傾斜してきていると捉えられるのではないだろうか。